
迷宮には探偵が

霜月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

迷宮には探偵が

【Nコード】

N0722Z

【作者名】

霜月

【あらすじ】

高校一年生の11月^{ストウ}須藤 璃桜^{リオ}は親友の死をきっかけに廃墟と化したカフェ・ラビリンスの店員兼探偵事務所・ラビリンスの探偵林^{リンダ}道^ウ 瑛士^{エイシ}に出会う。

瑛士の手伝いをするようになった璃桜はラビリンスに飛び込んでくる難事件を何とか解決していく！！

prologue 〱 〱 〱 箱の中のキオク 〱 (前書き)

えっと、初めてなので上手じゃないし読みにくいかもしれませんが
どうか最後までお付き合いください！！

prologue 〱ゴミ箱の中のキオク〱

これは俺がゴミ箱に捨てた昔の記憶。

あの人はいつも笑っていた。

俺はあの人の笑顔が大好きになった。

あの人が大好きになった。

「大切だ」と思った。

「守りたい」と思った。

そして、また期待した

「あの人なら俺をもう独りにしないでくれるんじゃないか」と
でも、それはただの淡い妄想でしかなかった。

土砂降りの雨の日だった。

拳銃の銃口から放たれた弾丸は

あの人の心臓を貫き

俺の妄想をかき消した。

簡単に俺の心はまた壊れた。

ホントの母さんが居なくなってから、初めて人が信じられたのに
運命ってのは思ってたよりも綺麗じゃなくて、
残酷だった。

十年前の悲劇、

冷たい雨が体を濡らし、

真実を洗い流した日、

あの人は、俺を育ててくれた母さんは死んだ。

俺が…殺した。

prologue、コミ箱の中のキオク、(後書き)

読んでくれてありがとうございます！

次回からは謎解きがあります(仮)。

どうぞ期待？

第一章・地下室には友人が（前半）

五時を告げるチャイムが公立愛光高等学校の校舎に響き渡った。

須藤 璃桜はそれを聞くと慌てて書いていた日誌を閉じ教卓の上に置き、机の中にある筆箱や教科書を鞆の中に放り込み足早に教室を出た。

廊下の冷たくなった空気を吸い込んで赤くなった鼻を左手で擦りながらガラスの外側に広がる紅と黒の混じった空を見て

「遅くなっちゃったな」

と独り言のように呟き、苦い顔をした璃桜は走る速度を上げた。

今日は璃桜にとって特別な日：璃桜の父親である須藤^{スドウ} 智也^{トモヤ}が一年ぶりに転勤先の東京から福岡に帰ってくるのだ。

本当はもっと早く家に帰って腕によりをかけた豪華な夕食を作ってあげたかったのだが生憎今日が日直だった璃桜は日誌を書かなければいけない結果帰るのがこの時間になってしまった。

「もうこんな時間だし作れるものも限られてくるな、お父さんの好物のオムライスでいいかな」

璃桜が下駄箱の前で夕食について色々悩んでいると後ろから意外な声が出た。

「璃桜、日誌終わったの？」

声の主は璃桜の親友、本城^{ホンジョウ} 朱里^{アカリ}だった。いつもなら驚いたりしないのだが、今日は例外だ。璃桜は朱里がてつきり先に帰っていたと思っていたのだから。

「一時間も待つてたの？もく先に帰っててくれても良かったのに…」
隠しきれない驚きを察されないように口を緩ませ言った。しかし、朱里は璃桜が驚いていると分かったのだらう。

「あゝつごめん驚いたよね、もう5時だしね。ホントごめん…話したいことがあつただけけど、璃桜なんか急いでるっぽいから、いいや」

こういう時の朱里の勘は怖いな…璃桜は密かにそう思いながら下履きながら履き答えた。

「うん、急いでるけど親友の相談には乗ってあげないとね。歩きながらでいいなら話聞くよ。」

しかし、朱里は複雑な顔をしてそれを断った。

「いや、いいよ。このあと私、行かないといけないところあるから。明日…ね。」

「そっか、じゃあまた明日」

璃桜は父に会えるのを楽しみに家路を急いだ。しかし、頭からはさっきの親友の違和感が離れなかった。

第一章・地下室には友人が（前半）（後書き）

ありがとうございました！！

第二章・地下室には友人が（後半）（前書き）

第二章と書いてありますが、「地下室には友人が」の続きです。

第二章・地下室には友人が（後半）

家のドアを勢い良く開けた璃桜を出迎えたのは十数個のダンボール箱と鼻をかすめるアルコールの臭いだった。

まさかと思い明かりの点いたりリビングまでスリッパも履かずに小走りで行くとそこには懐かしい顔があった。

「お父さん！！」

「よ、久しぶり〜元気だったか？」

テレビの前に座る顔の赤い智也の横にはビールビンが既に2、3本置かれお酒臭さは玄関よりも酷くなっていたがそんなことも気にせず嬉しそうな顔をして智也の側に座った璃桜は言った。

「もう帰ってきてたの？ごめんね遅くなって、今オムライス作るから待ってて。」

「おっ一年ぶりの手料理か〜ちいた〜料理は上手くなったのか？」

「う〜んまあまあだけど、今日は頑張るね。」

璃桜は立ち上がると近くにあったエプロンをして台所に向かった。

そんな娘を笑って見ていた智也もみていたドラマが終わるとそちら側を向きチャンネルを変えまた違う番組を見出した。

高校一年生にしてはファザコンでは？と思うような様子だったが、

一年も会えないとやっぱり淋しいものである。

早速卵を出そうと思いい冷蔵庫を開いた璃桜は「あっ」と小さい声を漏らし腕時計の時間を確かめた。

璃桜の様子がおかしいことに気づき智也は璃桜の方を向いて聞いた。

「どうした？そんなそわそわして、トイレなら早よ行けよ」

璃桜は智也の言葉に少し笑いエプロンを脱ぐとカバンを持って言った。

「いや、卵切らしてたの…まだ学校の近くのスーパー開いてるからちょっと行ってくるね。」

「ん〜分かった、じゃあついでにビールとツマミでも買ってきてくれ。暗いから気をつけるよ〜。」

「うん、気をつけるね。じゃ、行ってきます。」

バタンツ ドアの閉まる音を聞くと智也は酒を一口飲み小さい声で空に浮かぶ赤い月を見て言った。

「何か今日は人が死にそうな夜だな…」

「卵、ある。ビール、ある。オツマミ、あるっと。よし全部買った。」

スーパーからの帰り道、エコバックに入っている品物を一つ一つ確かめている途中、璃桜のスカートのポケットに入れた携帯から暗い夜道に似つかないポップな受信音がした。

「誰だろ、お父さんかな？」

などと考えながら携帯を開くとメールは朱里からのものだった。

璃桜、突然ゴメンね。

ちよっと、学校の地下室に来てくれん？

璃桜に会いたい。絶対来てね。

朱里

いつも謙虚な朱里がメールの文に絶対を付けるなんて珍しいな、と思いつつ、了解とメールを打ち返し学校の裏門まで急いだ。

璃桜の行ったスーパーは高校の近く。

高校には1、2分で到着できる。愛光の裏門は昔使っていたもので、今は簡単に開くのを璃桜は知っていたため学校に侵入することは簡単だった。

地下室というのは愛光の長い歴史で防空壕に使われていたらしい。

校舎は建て変わったにもかかわらずその地下室はまだあるが夏休み男子が肝試しをするぐらいにしか使われてはいない。

そんなところに呼ぶなんて何かあったのだろうか、と疑問を膨らませ

ながら、地下室へと続く階段を降り木製のドアを開け

「朱里」

と叫んだが返事がないことを変に思い、璃桜は男子が勝手に付けた電気のスイッチを付けた。

その瞬間、目の前に広がったのは異様な光景だった。

自分と同じ制服を着た女の子が右手に剃刀、左手に携帯を持ち死んでいた。

携帯の画面にはさっき璃桜に送られてきたメールが、その携帯には璃桜とお揃いのキーホルダーが付けてあった。

髪は乱れ流れ出ている赤い血が制服を染めている。

変わり果てた姿だったがその女の子は確かに

朱里だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0722z/>

迷宮には探偵が

2011年12月4日00時53分発行